
図書室

choro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書室

【Zコード】

N4422D

【作者名】

choro

【あらすじ】

放課後の図書室で、お互いに想いあつてているのに気づかない一人のお話です。

第1話

放課後の図書室にいつもいる彼女に恋をした。

いつも同じ場所に座る彼女。窓側の席。

その2に斜め向かい側が僕の指定席。

真剣に勉強している姿が可愛くて、

とせびり本を読んでいるその姿は微笑ましくて。

僕は本を読む振りをして彼女を見つめる。

でも、気づいてしまった。

勉強の合間に外を見つめる彼女。

何を見ているんだろう。

校庭では、サッカー部が練習しているはずだ。

気になつた僕は、彼女の視線の先を追つた。

サッカー部の先輩だ。

もしかして、彼女は・・・。

僕の思いは叶わないのかかもしれない。

それでも僕は彼女を見つめ続ける。

第2話

放課後の図書室。

いつも同じ場所に座る男の子がいる。

いつもそこで本を読む。

そういえば読書以外の事をしてるとこ見て見たことないな。

でも、

本を読んでいる姿が、なんだか絵になつていて、いいなつて思った。

それから、近づき遠ざかないこの斜め向かい側が私の座る場所。

ずっと眺めていたい。

でも恥ずかしいから、私は一生懸命勉強している振りをする。

疲れてくると彼の姿を見たいと思うけど

やつぱり恥ずかしいから彼とは反対側の外を見てしまう。

外ではサッカー部が練習中。

私の席は窓側だから、

外が良く見えるんだ。

私のお兄ちゃんがサッカー部のキャプテンだ。

ふふ、今日も頑張ってる。頑張れお兄ちゃん。

あ～あ、こんなことしてないで彼と話ができたら良いのに。

でも・・・今日も彼と話ができない。

クラスが違うから、接点もないし、きっかけもない。

きっと私の名前なんて知らないんだろうな・・・

でも、私も彼のことを良く知っているわけじゃない。

どんな声で話すんだろう?

好きな子とかいるのかな?

知りたいことがいっぱいある。

そして、彼にも私を知ってほしい。

願わくば・・・私のことを好きになつてもらいたい//

話してみたい・・・。

誰か、きっかけをください。

第3話

いつもと同じ放課後。

彼もいつもの場所で本を読んでる。

あっ、彼の読んでる本、前に読んだことのある本だ！

『あのとの接点』

甘い感じの恋愛小説だった気がする。

そういうのも読むんだ。

なんだか彼との距離が近くなつたみたい。

彼の読む本はファンタジーから哲學書みたいな難しいものまで何でも読むのだ。

私はあんまり難しいのは読む気がしなくなつてしまつ。

恋愛小説とかファンタジー系ならよく読むのに・・・

前に一度彼が読んだ本を借りて読んでみようと思つたけど結局挫折。

うへん・・・

今日は太陽の機嫌がいいみたいで、私の窓際の席はポカポカだ。

勉強する気分じゃないから前から気になっていた本を読むことにした。

3分の1くらい読んだところで、ちょっと一息。

うん、やつぱりおもしろい。

本の世界に入り込んでたためか、いつもの私がとらない行動

・・・彼のほうを見てしまった。

視線がぶつかる。

えつ。

いつから見られてたんだろう。

うわ～恥ずかしい。

私の百面相もしかして見られた！？

本を読むと感情移入しちゃうから・・・周りも見えなくなっちゃう
し。

あ～あ。

恥ずかしい／＼

いつこの場合は・・・

とりあえず笑つといつ。よし。

第4話

今日はとても天気がいい。

僕はいつものように図書室で本を読む。

彼女はまだ来ていないようだ。

彼女が来た。

“どうやら今日は本を読むらしい。

前から彼女が読みたそうにしていた本だ。

確かに有名なファンタジー系の話だった気がする。

本を読んでいる彼女の表情はくるくる変わる。

心が柔軟なのだろう。

主人公に共感しているに違いない。

勉強している姿も良いけれど、

やがて僕は「へんな変わった表情が可愛いと細づ。

今日は彼女の席はとても口当たりが良くて、

そこそこ、彼女のまわつとした雰囲気があわされて、

そこだけ空氣の流れが違つみたいだ。

どれくらい彼女のことを見ていたのだか。

彼女の本は3分の1ほど終わっていた。

彼女が顔を上げる。

本の余韻なのか、彼女の表情はどこか現実味を帯びていない。

ふと、彼女が僕のほうを見た。

視線がぶつかる。

もしかして、見てるのがばれた？

どうじょうつ・・・

数秒の間ののち、彼女はゆっくりと微笑んだ。

えつ・・・

ふわっとしたその笑みに僕の顔はくぎづけになる。

か、可愛すぎるーー

でも、僕が見ていたのに気づいたんだったら、

どうして極端そうな顔ではなく、笑ったんだろう？

とにかく、笑顔には笑顔で返すべし！だ。

僕も彼女に微笑んだ。

う、上手く笑えたかな？

なんだか凝視されている気がするのは気のせい？

どつかへんかなあ。

次の瞬間、彼は笑った。

か、かっこいい。

私に笑つたんだよね。

ビーフショウヒレを機に何かおしゃべりでも……

うへ、話題話題……なんでもいいや。よしつ

「何読んだの?..」

知つてゐるけど……

「いや?『あみとの姉妹』だよ。読んだい」とある。

「あ、あるー。」

「ふ~ん。その本面白かったね。」

「うそー。とってもー。」

本当に面白このでつい力いっぽこ断言してしまった。

私の答え方が面白かったのか、彼の顔が緩む。

何とかしなくてはつ

そんなことより私、単語しか答えてないんですけど・・・

それから何かしゃべったけどあんまり良く覚えてなくて

気づいたら帰り道。隣には彼。

暗くなっちゃったから送る。って。

初しゃべりをした上に一緒に帰れるなんてうれしくて

思わず「お願ひします。」なんて言っちゃったけど、

一人つきりだよ···緊張する。

ふと彼のほつを見ると、なんだか苦しそうな顔してる。

私と一緒にいるのやなのかなー。

「ねえ、いつもサッカー部のほつを見てるけど誰見てるの？」

彼が突然聞いてきた。

「？　おにいちゃんだけど？」

私が答えると、彼はほつとしたような顔になつた。

「そつか、おにいちゃんか。」

彼がつぶやく。

もしかして誤解されてた?

「じゃあ好きな人いる?」

彼に、どうせつっこみの気持ちは止めようかと考へて、いたとき元

この質問だったので、

私は彼の眼を見たまま固まってしまった。

自分の顔がどんどんほてっていくのが判る。

それを自覚して彼の顔を見ていられなくなり、

あたふたと視線をさまよわせる。

「君が好きだよ。」

彼の言葉にまた固まってしまった。・・・

「うわっ、ほんとこ。」

「へ、返事しなくちゃ！」

私も好きですって。

「・・・わたしも／＼」

私の返事は最後まで言葉にならず、

かわちへよひな小さな声だつたが、

彼には通じたりじ一。

といひもひれしそうな顔をした。

第6話

「何読んでるの？」

いきなり彼女が聞いてきた。

「これ？『わみとの接点』だよ。読んだことある？」

実は彼女が読んでるのを見て借りた本。

「あ、ある。」

彼女が答える。

「ふうん。その本面目そうだね。」

「うふー…とつてもー。」

少しからかい氣味に言つたのこ、力いっぱい肯定されてしまった。

やつぱり可愛い。

つい顔が緩んでしまつ。

それからなぜか判らないけど彼女が一生懸命しゃべってくれて、

気が付いたら外が真っ暗。

ちょっとやばいかも。

「暗くなっちゃったから、送っていくね。」

少しは抵抗があるかと思ったのにあっさり「お願ひします。」って
言われて少しうれしくなった。

それって、僕と一緒にいても良いくことだよね。

隣に彼女がいる。

彼女と話せて、一緒に帰るつていうオプションまで付いたうれしさで忘れてたけど、

彼女には好きな人が・・・。

でもほんとにそうだつて確定したわけじゃないし。

よしつ、じじは事実確認を。

「ねえ、いつもサッカー部のほうを見てるけど誰見てるの？」

少し恥ずかしそうな答えが返ってくると思つていたのに、

彼女は不思議そつな顔をして、

「？ おにこちやんだナビ？」

といつた。

へ？ おにこちやん？

じやあ好きな人じやないのか。

は～よかつた。

「やつか、おにこちやんか。」

そつとつぶやいた。

じゃあ、彼女に好きな人はいるのだろうか？

「じゃあ好きな人いる？」

僕の疑問は知らぬ間に口から飛び出していた。

彼女は驚いたように僕の眼を見たまま固まってしまった。

その顔がだんだんと真っ赤になっていく。

この反応つてもしかして・・・／＼＼

金縛りが解けてきたのか、顔を赤くしたまま、

あたふたと落ちつかなげに視線をさまよわせる彼女を見て、

僕の疑問は確信に変わった。

そして僕は彼女を手に入れるべく口を開いた。

「君が好きだよ。
」

再び固まつて、さうして顔を赤べする。可愛い。早く返事をして？

「・・・私も／／」

小さな声で彼女がさわやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422d/>

図書室

2010年10月9日06時19分発行